護国寺の寺報

その想い

第１４号
発行人：谷泰智
Ｒ２年８月８日発行

☆今こそ、一切皆苦に学ぶ

梅雨が明け、一斉に暑さが押し寄せてきたような今年の夏ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか。先ずは、久方ぶりの寺報になってしまいましたことをお詫び申し上げます。私事で恐縮ですが、令和の始まりからついこの間までは、もがくことの多い辛い時期でした。けれども、周囲の支えや離れていても励ましの想いを送って下さる檀家様方のお蔭で、私なりになんとか踏ん張ることができ、今こうしてまた寺報をお届けする運びとなりました。今この瞬間、この寺報にお目通し下さっている全ての皆様方に改めて感謝申し上げます。

さて、もううんざりするほど続いているコロナ禍ですが、残念ながらこれは誰にとっても避けて通れる問題ではありません。ご自身の心配はもとより、皆様一人一人にとって大切な方々の生命を脅かす不安に苛まれている方々、さらにはこの厄災に関連して経済的に非常に厳しい局面の中奮闘しておられる方々、皆様の心身にのしかかる疲労は如何ばかりかと察します。

そこで、こんな困難な世相の時だからこそ、お釈迦様の教えを少しでも活用していただけるように、仏教の根幹をなす四法印の一つである『一切皆苦（いっさいかいく）』について、皆様にお伝えさせていただきます。

これは字のとおり、「一切は皆苦（みなくる）しみである」とするお釈迦様の教えです。しかしながらそう一方的に断言されても、我々にはたくさんの喜びがあることも事実です。それぞれの大切な人達との営みは基より、お仕事や趣味における遣り甲斐、未来への希望など・・・。私でさえ寧ろ一切皆楽と言えるのではないかと思ってしまうくらいです。

結論から申しますと、「全ては苦しみ」というこの言葉の本意には、実は「全てが愛おしいものであるからこそ」という大前提が下敷きされているのです。つまり、現在目に見えて、しかも感覚として受容できる苦しみに限らず、そもそも我々は何かを愛おしいと思っているからこそ、その何かは様々な機縁によって全て瞬時に苦しみに変わってしまう惧（おそ）れを孕んでいるということなのです。

ある識者は「コロナは我々の社会の脆弱（ぜいじゃく）さを露呈させた。」と述べられていましたが、仏教的な見方をすれば、その脆弱さあってこその我々人間なのです。つまり、合理的に全てを割り切ってなんでも個人主義でチャチャッと前へと進めないのは、我々が無意識に具えている他者への想像力、言い換えれば仏教的な慈愛があるからこそなのです。

ですから、今多くの人々が己の一挙手一投足の運び方に悩み社会不安が広がっていますが、それは正に今まで一切皆楽に見えていたものがコロっと顔を苦に変えたというようなもので、仏教で娑婆（シャバ）と呼ばれるこの世界の実相は、初めからそのような頼りないものがあたかも確固たる安心のように見えていたということなのです。

しかしそれを悲観する必要はありません。お釈迦様曰く「人は行いによってそうなるのだ。」という金言に倣えば、今だからこそ我々は自身を拠り所とし、より一層己の心身を整える時に在るのです

それは今まで以上に労力を払う生き方ではありません。少々逆説的ですが、不安があってこそ当たり前という安心を再確認するだけで自ずと昨今の世相にも慣れてくることができます。決して社会の何かが壊れたわけではなく、世の実相が少しだけ見えやすくなったのだと、どうか前向きに捉え直していただき、我々にできる『行いの力』をお互いに一層信じて参りましょう。

☆高知県佛教会５０周年事業のご報告

早や半年近く前のことになりますが、上記の事業に理事の一人として携わらせていただきました。

今年の漢字で高名な京都清水寺貫主森清範師の講演会の手前に、宗派を超えた式衆４０名で記念法要を開きました。会場が一体となって各宗派の御本尊の宝号や念仏や題目を唱和することができ、非常に感慨深い法要でした。

（画像の一番右の山伏姿が私です。→）

立50周年で記念法要
知県佛教会「法輪」本尊に各宗派
30カ寺でつ で設立50周年記念法要を 念講演し
仏教会は2月 営んだ。北法相宗大本山 法要は
市内のホール 清水寺の森清範貫主が記 まり、会
曹洞宗元 導師に各 が出仕。 シンボル 「法輪」 映し、本 般若心経 傷）を読 牟尼仏、 薩、南無 大師遍照 蓮華経と る宝号・ が唱えら

ーンに映された「法輪」を本尊に見立て、般若心
宗派の宝号・名号・題目などが唱えられた